

第五講 歴史のモダニズム：歴史の場としての国民（ネーション）

【前回のレポート講評】：「歴史学とは何か？」

歴史の一回性を強調＝自然科学との相違

歴史研究の主観性

歴史学とは解釈の学問→真実へのアクセス＝特異な研究方法

未来に役立てる学問＝歴史学の実用性

自分の人生に役立てていく＝実用的歴史学

成功のための学問＝歴史学の実用性

過去の過ち・戦争の惨劇→戦争を繰り返してはいけない＝教訓歴史学

記録を残した過去とそれを読み解釈する現在との隔たり

将来に生かしていく＝実用的歴史学

歴史学はその解釈において時代に影響される

過去を扱う学問＝歴史学の対象分野の特殊性

過去から現代の問題を解決する＝歴史の実用性＝通俗的歴史学

ルーツを知る

過去を知りたいと思う本能に根差している

過去の事実を知り、記録が事実かどうかの検証をする史料批判を利用
＝文献学の手法

100%過去を知ることにはできない＝歴史学の不完全性

一回性という点で自然科学との違いはない

都合よく解釈される側面もある＝歴史学の弊害＝ナショナリズムと歴史学＝実用主義

過去から現代を見る＝現代の特殊性を知る

コメント：

実用主義：政治史なら意味があるが、経済史だったらどのような意味があるのか？あるいは社会史だったら？産業革命で、紡績機械が職人の一か月分の給金で買え、資本家になるのはそれほど困難ではなかった、ということからどのような教訓が得られるのか？

鉄道と統一時間の関係を明らかにすることや、江戸時代の人々の時間観念

からどのような実用的教訓が得られるのか？

教訓史：第二次大戦の様々な失敗事例の研究から次の戦争では絶対そのような失敗を繰り返さないという教訓を得、次は勝つ戦争をするというのは有りか？

参考文献

角山栄『茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の社会』（中公新書）1980.

同 『時計の社会史』（中公新書）1984.

何故、歴史は国民史として語られるのか？

ベネディクト・アンダーソン（白石隆・さや 訳）『定本想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行 -』
書籍工房早山、2007年の衝撃。

言葉が国民を作ってきた。

近代以前：多言語な世界。国家は王という人格を通して形成された多様な言語世界を結合体。

近代：単一言語化による国民形成。

長谷川秀樹「現代フランスにおける言語問題 - 地域語と欧州少数地域言語憲章をめぐる -」

『立命館国際研究』12 - 3、2000年、217 - 234頁。

オイル語・オック語・カタルーニャ語・アルピタン語・コルシカ語・アルザス語・フランコニア語・フランドル語・ブルトン語・バスク語

革命当時、フランス語を話していたのは2500万人中300万人に過ぎなかった。

1918年 アレマン語の禁止

1992年 共和国憲法（改正）第2条：「共和国の言語であるフランス語」と規定

1994年 トゥーボン法（フランス語の使用に関する法）：外来語の使用制限・罰則

フランスの国家的分裂を招く

2006年 アメリカの会社の英語使用に対する罰金刑

オーストリア・ハンガリー帝国の国章（1915年制定）

二つの盾とグリフィンおよび天使：オーストリア（左）
とハンガリー（右）。

盾の中にイストリア、ガリツィア・ロドメリア、クロ
アチア、スラヴォニア、ダルマチア、ボスニア・
ヘルツェゴビナ、ボヘミアなど。

盾の間に騎士団章。

歴史が論じられる「場」の問題（近代歴史学の問題）

民族（国民）という「場」

近代が与えてきたもの

せいぜいフランス革命にまでしか遡れない

現代は〈トランス〉を場とするようになっている。

オイゲン大公：18世紀の軍人

北イタリア・サボア大公国の生まれ・フランスに移
住・ハプスブルク家に仕える。

場のトランス

ロンドン郊外のサザク：聖と俗の場・政と性の場のトラン
ス

モルトケ：デンマーク出身

プロイセンに仕える

アルキビアデス：アテナイの政治指導者

スパルタに亡命

ペルシアに亡命

アテナイに帰国

再び亡命

参考文献

ベネディクト・アンダーソン（白石隆・さや 訳）『定本想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行 - 』書籍工房早山、2007年。

大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007年。

パトリック・ギアリ（鈴木道也・小川知幸・長谷川宣之 訳）『ネーションという神話 - ヨーロッパ諸国家の中世的起源 - 』白水社、2008年。

田中・中井・朝治・高橋（編）『境界域からみる西洋史 - 文化的ボーダーランドとマージナイティィー 』ミネルヴァ書房、2012年。